

# 中山三屋女

一八四〇  
天保一

幕末明治維新のわが郷土徳山の誇りうべき女流歌人中山みや女は、周防富田字中山の生れである。（現在の徳山市加見字中山）

本姓は戸倉。父の戸倉恭輔（恭藏ともいう）は世々加見の中山地区にあつて農を家業としていたものだったが、父恭輔は十四才頃少年の身ながら青雲の志に燃え、遂に家業を弟にゆずつて、中山を姓として遠く江戸におもむき、遂に後年幕臣某に召され土籍に列するようになり、後には南部侯に奉仕していたが、その後京都に転住し妻を娶つて、天保十一年九月二十五日、三条丸太坊の寓居でみや子をもうけた。

みや子は幼少のとき慈母を失つて他人の手に育てられたという頗る薄幸の女性ではあつたが、天はこの薄幸のみや子にいたく同情して、国学ことに歌才と書画才にはとても非凡卓絶なる芸能才を附与したものだつた。

みや子が幼女六才のとき、或る家で催された歌会に列席、左記のような「歳暮」という歌題に対して

暮れてゆく今日の日かげおしみつゝ春まつ心楽しかりけり  
というのを詠んで集まつた一座の人々をアツと驚天させた。  
その翌年七才のときにも或る歌会で、「埋火」という題に  
山賤が朝霜しのぎこりし木の寒さにも似ぬねやの埋み火  
というのを詠んでそのいみじき天才のほのめきを又満座の人々に啓示した。

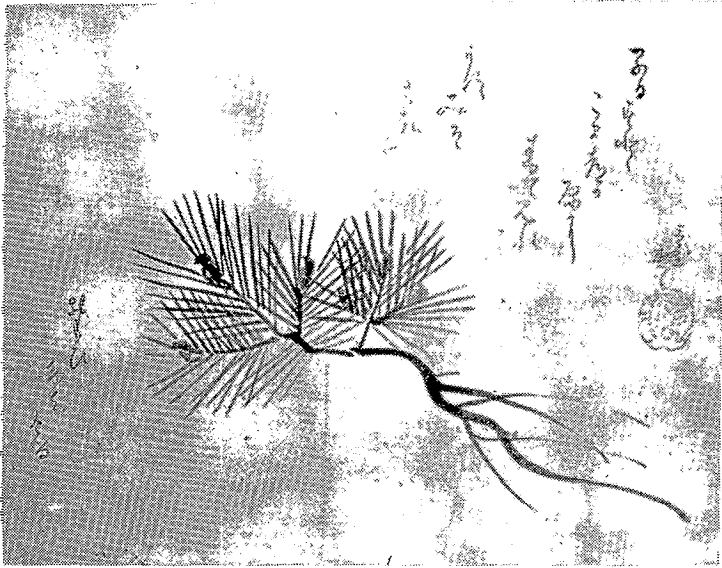
だが、げに天才のひらめきではある。この一座の中に、その時代の一大巨匠として全国の歌壇に名声の高かつた高崎正風もいた。正風はみやのその歌才を認めて、この幼女後世恐るべしと厚く信頼して何かと指導、慈鞭を施して貰つたことはみや子にとつては、実に絶好のチャンス、恩恵だつた。

みや子は香川景恒の歌門に入り、所謂桂園歌風を身につけ、これにより桂園派の歌人は勿論、太田垣蓮月、高畑式部、税所敦子等と親交肩を列べるようになったのである。

みや女の父恭輔は二十石扶持で、後には中山将監と改名して京都東山地区に安住していたが、嘉永三年六十二才で他界した。

みや子は十二才頃の時にはすでに百首詠をなしていた。その歌才の天才的なひらめきは、京都の歌人仲間をして将来を期待せしめていたものだつた。父恭輔は、つねにこの子男子なりせば！と友人知己等に慨嘆していたそうである。

頭脳の英敏な彼女みや子は、父の心を体得して少女の身ながらも深くその時代相をみつめ、勳皇の初一念に献身するところ



(中山三屋女の和歌)

があつた。

歎ならぬ身にはありしを大君の御国のうちの民ならずやはこの歌詠のごとく、若き女性の身をもつてつとに勤皇愛國に献身して、風雲の志を抱き勤皇の志士と交つていた。

父中山将監が他界した後、みや子十八、九才の頃には播州明石に通世、草屋の寓居に帷を下して田舎の子女達に歌や画を教え糊口の資に団扇、扇子、短冊などに架墨していたものだった。

みや子は美貌の若き女性であつたが、とてもしつかりした性格で、平常つねに手にして身辺に離さなかつた如意があり、その板面に

「板面磨止木蓮伝仏処」という字句を刻しこれは『いたずらをするところでおつぞー』という意味のものであつた。これによつて見ても、みや子の男まさりの負けぬ気性一徹非凡さが想像せられる。

ゆうがおの花のしるべにかえるかな夕べおぐらきやぶかげの家

今はたゞなしと告げてよ世の中にありてあるからある身ならねば

若くて剃髪、墨染の衣の仏弟子となつたみや子の青春は、まことに一面からすれば、余りにも淋しい人生行路だった。もとより幼くして慈母を失い又年若くして父を失つた彼女のはかない

宿命のしからしむるところではあろうが、いつしかに淋しい老嬢尼姿だったのである。

いろ／＼な諸説がある。初一念の尊皇運動のために、志士間を奔走したがその又旅路は一面では廻避の便方だとも言われ、また母への追慕専念の徹悟だとも言われ、または失恋のためだとも言われているが、確然たる資料はない。

中山みや女は幕末維新時代の女流歌人として、太田垣蓮月、高畑式部、税所敦子等とともにその歌名を一世に歌われたものであるが、これらの人々に比較すると多少の見おとりのするのは致し方がない。これは若くして世を去つたこと(三十二才歿)その外にその時代の宮中や藩主に對して良い知遇、つてに乏しかつたためでもあろう。

前記したような男勝りの一徹性もたゞつて。だから前記の人達の宮中歌人、藩庭歌人に對してみや子は民間歌人の差もあつたのだらう。

中山みや子の一生は、全く旅で暮し旅に送つたものである。あたかも同じ防長の女流、下関の田上菊舎尼と好一對であつた菊舎尼の方は女流俳人で、同女は同棲九年の夫に死別、萩の清光寺で聞心上人によつて得度、尼となり日本全国九州路のはてを旅から旅にその一生を送つたものだった。(七十四才歿)

みやは近畿、山陽、九州等を歴遊しては盛に知名の士、同好の歌人を訪ねて歌道に精進した。その間「旅日記」「交遊録」

「一日百首」「一夜百首」等の記録や多くの歌面染墨を後世に残している。

ことに中山みやの彩筆は清雅翔すべきもので、山口県下でも相当に愛蔵されている。筆者も戦前三幅所蔵していて卯の花の面賛幅歌は、今宵なお時々切々追慕がとて深甚である。

「旅日記」の一節を紹介して見よう。

#### 旅日記

周防長門わたりの旅居もいつしか三年になりぬ。去るは早う。

筑紫の方に志ざす所ありけるを、近頃うちつゞき世の中静かならず、その浦浪立ちさわぎ、かしの山風吹き荒れるなど道の程も越えもとなう覚ゆるまゝに、泊るともなく行くともなくて、一日二日と待ち過す間に、あまたの月日を重ねつるなりかゝれば今は思いかえして都の方にや立ち帰りなましなど思ふなりぬる。折りしもはるかなるみちのくより思ひ起して長崎にもせんとする人あり。おのが旅宿を訪ぶらへり。こは、さきに吉備の国にありつる程、親しくなしける友なりければ、この由をきゝてあなまさなやこゝまでものし給ひながら、いかでか空しうてはやみ給ふべきお供になぞと、そそのかさるるままに卯月六日に思ひ起して明る七日出でたつ。(中略)

この時に登るほどより、けしきいとよし、去年の冬、西の国にもせんとして、豊浦のこほり西市まで帰り来りけりなむその折もこの峠をなん越えたりし。

師走の二十日あまりなりければ、雪いと深うふりつみ、ゆきなづみたりしもたゞ昨日今日の心地するを、今日は西方の山河、晴れわたり、青やかにいと涼しう。さま／＼の若葉も茂り合ひたるに、谷の方になほ一村白う見ゆるは、なほも去年の雪の残れるやと立ちどまりて見れば、卯の花の盛りなりけり。

霜水ふみ登りつる佐野の山まだ卯の花の雪に越しつ、峠に至れば、一つの小屋あり、旅人の往来に憩ふ爲にや、すのこなどつくりてしきもの設けたり。末松もたせつるわりご、さゝえなどとりいでて、うちあかずくみかわす程に、日影やゝかたむきぬ。

今はとて、立ちわかれんとする程に、さすがに一年あまりなれにし里の名残りよろづにもあはれなり。

去年見つるながめもなし別れ思ふ涙にくもる佐野のたむけは

小郡までものすべかりしを、かの峠におもはず日たければ、このふもとなる台道といふ里に宿る。

未遠き小松が原をゆく水のながれてつきぬ君が恵は  
文中にある「末松」は宮市の末松軍平のことで、みやは親交があつて相当にじつこんになつたもので、この佐野峠の別れは末松軍平との別離を一文にしたものである。

みや子は、九州巡遊の途次長崎に滞在中、不幸にも発病して下痢症に悩んだので、急に帰心矢のごとく故郷の徳山宇中山に

帰ろうとして帰国の途次三田尻新町末松軍平宅で衰弱が甚しく遂に最後の日がやつてきた。薄命の美尼に。

時は、明治四年六月二十一日、享年三十二才だつた。辞世の歌は

水のあわのさだめなき世にながらへてめぐり合ふ瀬を

まつがはかなき

である。

富田政所の善宗寺にその墓がある。

後年、みや尼の三十三回忌のとき下松の矢鳥作郎氏がみや子の遺歌集「浮木の龜」と歌碑とを刊行建碑したものである。一代の女傑暮末の名歌人中山みや、もつて瞑すべきである。

歌碑は善宗寺の山門をはいつて裏山の中途にあつて、ちよつとした大きな自然石に、

「水のあわのさだめなき世に」云々とした辞世の歌句が彫歌され、裏面には、

探蒼知玄大姉 中山三屋 明治四年六月二十一日寂となつて  
いる。

かくのごとく薄命の多彩女流歌人に偉いなる最後を飾つてやつたその恩人は、前記の下松、矢鳥作郎氏である。

この人はとても著名で防長ことに徳山下松地方人には、誰ひとりとしてその名を当時は知らなかつたものは稀れだつたらう。有名な財界人であり文化人だつた。若き時代はとても勤皇の志士として、東奔西走したものだつた。

矢島氏は徳山藩士伊藤家に生れ、徳山上御弓町故伊藤虎雄の叔父に当る矢島姓は、後に彼が元徳山藩公毛利元功に随行して、英国に留學するとき改姓したものだつた。

矢島氏は下松の宮の州御殿と呼称されて、行人の眼をそばたて、いたあの広大な磯部邸を後に買い受けていたものだつた。帰朝後産業財界の大立物となつた偉業はとても太陽的な存在であり、文化的の遺蹟の数々がある。桂城と号し、和歌を好む。詳しいことは省略する。

かくのごとき矢島作郎は中山みやとは、防長同郷の關係もあり、一面には矢島氏の和歌趣味道もあつたので、親交知己の間柄だつた。かくのごとき好縁が刊行及び歌碑の建設と千古の榮を飾つて貰つたものである。

矢島作郎氏はみや尼の歌一千余首と文稿とを、矢島の雅友高崎正風に拔萃、序文も依頼して私費で出版したのである。(明治四十年)

高崎正風はその序文でこの稿を閲し、書名をつけ序をさえ書くこととなりぬる宿世のあやしき契こそ……(中略)

あわれこの人をして命長からしめば、蓮月尼、楓掌侍(税所敦子)にも立ち並ぶべかりしものをとそらるにその薄命を悲しむのみ。されどこたび矢島ぬしの厚意により、年月塵深く埋れいたりし金玉の言葉、世にあらはれ朽ちてぬべき芳名とこしなえに伝はらむは、こよなき歎びなりけり。云々と前書して

いる。

なお選歌集の題名を浮木の龜と命名したことを、高崎正風は「嵐峡下送別巻」に書きのこされた左記のみや尼が正風に贈つた歌句にちなんでなしたものと附記している。

うれしくも花の盛りをあいにけりこれや浮木の龜の尾の山  
この嵐峡花下の宴には、高崎正風の外に八田知紀、小松帯刀、大久保利通、井上長秋といった明治維新時代の英傑第一流の名士歌人が参加している。それに参加した中山みやや子も、当時声名のあつた女流歌人であつたことが、たゞちに肯定できるのである。高崎正風は、この「浮木の龜」の巻末に左のごときみや子追慕の心境を詠じ披瀝している。

散りて後ことばの花は咲く春にあふも浮木の龜にやあらぬ

正風

最後に、附記して置きたいことは、本稿のはかどりを得たのはこれ全く市内加見地区の松村清路氏の助力によつたことを銘記する。同氏は元加見村小学校長その他の経歴があり、防長郷土史に関する造詣が深く、山口県地方史学会員の一人である。かつて下松地方史学会に於ける講座「矢島作郎と中山みや子」と題する氏の記述が本稿の基本資料の一つとなつたことをこゝに附記し、松村清路氏に深甚なる謝意を表して置く次第である。「浮木の龜」は一千余首あつたものであるが高崎正風の拔萃により左記のごとく撰句されている。

「浮木の亀」

春の部 六十八首

夏の部 四十六首

秋の部 六十二首

冬の部 三十一首

恋の歌 四十一首

雑の部 百三十五首

合計 三百八十三首

文章の篇

一、春のはじめの詞

一、初秋のころ、さつまの国にかえる人に送りける詞

一、雨の後高台寺に萩を見る詞

一、雪のあしたの詞

の四編になつているが、最後の雪のあしたの詞を抜書して見よう。句点、句ぎり等は筆者の読者に判読し易いために施したものである。

雪のあしたの詞

いづれを梅とわきかたうふりつもりたる雪の、あしたのさまいとおもしろう見渡されたるに、跡つけむは、いとあたらしきわざながら、埋れはてんもまたくちをしき心ちしければ、ふりわけ髪のはどより、ことにしたうしける友だちのもとをとぶらへけるが、彼方もうれしと待ちよろこびぬるけしきながら、猶と

みにもたいめせてきたなげなき女のわらはをしてかくぞいはせたりける。

あら玉の年の一とせとひもこでけふ降る雪に跡つけんとやげに世のわざのいとまなきに日ごろ音づれざりけるをえんじたるも、ことわりなりけりと中々につらうもあらぬものかな、さすがにねたうもおぼえしかば、雪によりいとほれんとは思ひきや、まゆみつきゆみ年へつる友といひすてゝたちて帰らんとしければ、いそぎ出でて袖をひかえてあい思はで袖うちはらひ君しいなばわが身を雪とおもひけぬべきいたづらになしはてんとおぼしけん御心の内こそおそろしう待れ、さりとて今はとどまり給へやつみ深きわざなさせ給ひ、そなたはるゝもむかしよりかたみに心へだてぬ友がきの中のうるはしみになん。(了)